

五
伽
う
不
様
五
全
巻



1647

元文五年庚申 板
百四十年



御伽守は補猿序

元文五年庚申は春猿乃尻

美赤る虚説と君子のいんさ

の嘲や羨みと見ざるま那れ

いさゆきけを捨いあ人こ

鶴の鳴きと殺をけりやう

仁の祢ささるみ書あふぬ

とと遠東の家乃餅う環のぼる
るるる一室に一日點慧書林来り
て債錢のふさふを欠て足成ととと
といふ稿紙神妙一室ととと其とと
のう種一とひやえふ柄れ様とやれ飯
てうり勢一と心地うり一にこのあら
ふとれ柄一彫刻ととと五のそとと

草紙のり一推し来りて座と書に
ととと皮を剥く靴ととと人といとと
とと迷惑とととふとととはととといえとと
足と様とととととととれ辞退の
ととととととととととととととと
ととととととととととととととと
ととととととととととととととと
ととととととととととととととと
ととととととととととととととと

るゝ心^{こころ}をせういて心^{こころ}申^{まを}す
静^{しずか}観^{くわん}堂^{どう}をわいて書^かす

作者 摩志田 好話



御伽空穗猿惣目録

卷一

猿^{さる}み^め監^{かん}紙^し教^{かう}く^く後^ご世^{せい}と^と事^{こと}
猿^{さる}友^{とも}人^{ひと}く^く婦^ふ女^{にょ}と^と集^{しゆ}い^いく^く
清^{しやう}水^{すい}如^{ごと}く^く狂^{きやう}歌^かと^と詠^よい^いて^て茶^{ちや}会^{かい}交^{かう}
猿^{さる}大^{だい}に^に小^{せう}に^にと^と事^{こと}
猿^{さる}合^がれ^れ富^ふ高^{かう}恋^{こひ}疾^{はや}と^と受^うけ^け事^{こと}
猿^{さる}父^ふ乃^の百^{ひやく}姓^{せい}宗^{そう}小^{せう}命^{めい}と^と知^ちり^り事^{こと}

坊園志満つ化者て生捕し

卷之三

望城人て欺と欲討と修り

長崎丸山依返を治ちん横能て従ふ事

慶阿弥と云経師餓鬼るあちし

卷之四

一言観音利生名事

鴻の巣猪野守れに玉小児て悩む事

繪馬の精あつて夢問答せし事

卷之五

秩父慈眼寺くつてん霊驗れ事

三村紀伊守山姑て付る事

宮下権内様てあつて危難て脱する事

福荷れ神威あつて富て得る事

佛伽婆都本猿目録終

御伽宣穂猿蓑第一

猿蓑活紙教て候世也一事

ひう洛陽小川通りにははなをよとて流しをたかひり
生得てまゝとてあて急些むあらぬ男なりけとせむるに
さうゆはす候しくおれ家より細工でまゐる人おれを
おろつゝ家にも常えいさふらゝをたかあふ年のを
例よりまゝを氣けをしく。うらゝ大れりとまゐる。これか
おろゝ何ぬありあつては来れ人も愛め。こぢろ。ま
よる。まゝ。候。る。と。け。ら。中。に。田。舎。も。の。と。思。へ。く。流。澤
れ麻紙織る柄の大細指風を愛け。み。お。い。を。ら。う。小。を。た

御伽宣穂猿蓑第一

五

猪をいごさち無にが新母だ。とみ居たり元来ちと次
 仁を何つきき寄る止へ。お新こ入く休をし。又後より
 晴く新新れむは先と係せ。とく晴るまで待と
 いづげと思いのわ新橋も何るものぞう。先よくそ乃
 子ととと。んすあして新あ。と念あらね。いけと。彼
 男はくく。新と。はと。新あ。何つう。何あ。の。は。大。切。乃
 ち。ん。世。代。あ。と。と。は。新。と。け。致。し。ゆ。ふ。ん。の。わ。新。と。ん。い
 新。何。る。る。り。や。事。新。い。え。と。は。を。新。に。わ。て。ら。と。後。痛
 ち。と。う。ふ。あ。と。り。新。を。仕。い。何。と。新。は。某。一。粒。終。り。の。と
 くら。け。ふ。い。い。あ。れ。と。や。と。新。程。の。何。と。何。う。じ。方。入。く

[illegible]



立寄りけりく桑相するところある事か身の上め
わつり秘蔵の猿をいそ種をいつんといふやとやと
梁のうふむつて持しよけん件の猿をいそやうてけ
おとれ前めいよりぬちら決あふ後思ひいせん後
つゝそく歩所し猿のし柳の何方に居てうたえつゝ
しづそといはのむまんうしつづりぬんと不審を
しづ相考殿の系部の人ともおやえをふすり。おふい
終ふた猿の幸骨するにいふ此猿をて速むいつ
と聞えくは人いけ猿か付てゑるお相持りけさうぬ
おとろむし。し生國を丹波の奥のあく人里をくを

ぐゝたむが朝夕馴てあそりる。猿はよみ深にお
けりお愛さむし。いふころ憂さほおるう。おし
がよとあふ情人間おし。わさし深さのう
わが房をくあふおとせし。てお前毎に念をたこ
く。おつれ程あふお堂我面おほんでよく人のこえ
とやうかうし。ま婦う。し。時をなほ。う。つ。し。海を
え。い。と。あ。ひ。ん。さ。も。塔。り。あ。る。ふ。さ。年。れ。秋。あ。ま。い。懐
胎。月。満。く。春。め。の。う。み。あ。る。お。彼。猿。と。い。へ。く。此。猿
つ。し。猿。を。め。り。し。う。お。お。我。の。春。や。の。油。を。て。う。と。さ。の。お
は。ふ。い。材。猿。の。お。め。や。か。い。し。う。ん。門。の。あ。ふ。死。し。お

おふいねあう

うつては猿の母をうむとて乳をけしむ。さきおを
 妹ももうそこそで死ねば、こけすに之殺しにせんも使
 るれとなり。よし何をも固縛するめと我妻の
 乳房を切つてけ猿が飲まむ。くして程よりてい
 そゆら海にうつる人もふりある。源太夫あや
 陸奥の老ものゝうふ思儀の縁にて我よはまぢい
 久しく丹波の年紙経れども奥におきて人のあり
 とせしむればれのゆれ奥列とて我とみ赤（ひ）とて
 とちあさで何さういへぬ此猿女房が初夜よく
 さうわきほくを返すあう初めとてふ家も於て我

とけ様でつうあめい必陸奥仰せくは月紙糸一ひ。い
でしゝふはるぐさみふ。お世が藝能を以て自のおくづりえ
はもいと満えぬ程者ともむに〜愚絢烟度と云を
或の茶飯をもげせ極くう用紙糸するところ中くある
人どはるんより進みほさきうとする人驚歎せごと
うある。くづくて念ご存よ。やぬを付く立出ぬよお
次とあらうしれろとて人けるかなる常れさかひことわ
指習り角ぐひるれ終終を法まれ乳とせめて。その病と
知ると云と不安張なりと秋り感して病はなう
多年信心さしひろ令累山の守戒毎衆を以て

倭の仍者乃 碧嶺なりと。さあふを移し方と
其の門に戸さびく。けが先家酒みあへ。いれ
やで用ひ望固あきうめうぬふ勢流はくくと
してけりのかくてあうんうち。そさくれ人のうき
ぬづー一教多けの。おとらるなうあくうんさぞやと
思ひて系師乃を仍あふむりて。あうけしうてやけ
ねんまけ文智傑出の人あく。あうと急患中一の
々と先かの織をすう。よせて奉れやうとむんさ
て海申活和てぬさせ活あつてもさ系師を。さぬまに
柳ぐ答れ色あきん分けはる倭人わざと物とわげ

あういこのをるう猿あくとつう我々人ばみ見あ海師
傍ある海やと。さういけさむ中あふたやうけさ
の倭のそとあめとちりて用ひのゆひのそとあき
つと。それぐう秘蔵の猿とほきあうりてさう
と。あうが怪しういえにみあーけうん。うらけれて改
あめあうり初くむ中あきさうあめや教さへん
急對帝てれーたうる。け秘蔵さうあめさう
体あくそ猿さく海があきいさうの周紙糸さうゆ
ゆふあ我あうそ。その藝をあうさうとあければ
あうさうくあきと。げいとけくしてあうんと

[illegible][illegible]

信濃國本郷の駒がうけ寝をみせし第一乃ちあひみてひと

[illegible]

て京師^{けいし}お生^{なま}長^{なが}たりた^たか^かふ風^{ふう}信^{しん}のあ^あか^かし^しと^ともあ^あめ^めく
来^きり^りあ^あ推^{おし}ま^ま瘋^ふ人^{にん}あ^ある^る里^り人^{にん}あ^あけ^けり^り情^{じやう}つ^つと^とより^{より}そ^そ好^{こう}色^{しき}
れ^れあ^あう^うう^うの^の荊^{けい}棘^{きやく}と^とも^もて^て実^{じつ}は^は骨^{こつ}疲^{はい}と^とい^いふ^ふと^と家^かあ^あ来^きり
て^て娘^{むすめ}が^が難^{なん}文^{ぶん}と^とい^いふ^ふ人^{にん}と^と紙^し思^しひ^ひ桃^{とう}李^りあ^あと^との^のつ^つく^くに^に下^か月^{げつ}と^と
後^ごを^をあ^あり^りて^て海^{かい}の^のあ^あ七^{しち}里^りが^が程^{ほど}め^めと^と駢^{へん}が^が嶽^{たけ}の^の姥^{うば}が^が茶^{ちや}を^をと^と
あ^あら^らう^うく^く往^{かう}還^{くわん}の^のち^ちを^をと^とり^りて^て神^{かみ}と^と此^こ茶^{ちや}や^やあ^あ体^{たい}の^のこ^ころ^ろを^をあ^あの^の好^{こう}み^み
と^とれ^れど^ども^もい^いひ^ひと^と決^{けつ}い^いつ^つる^るす^すと^と此^こ因^{いん}縁^{えん}は^はあ^あり^りと^とい^いふ^ふ
あ^あら^らう^うの^のあ^あ朝^{あさ}夕^{ゆふ}併^{へい}を^を秘^ひん^んと^と経^{けい}を^を補^おし^して^てあ^あら^らう^うと^と世^せ間^{かん}を^を
あ^あら^らう^うの^のあ^あ紙^しと^とい^いふ^ふあ^あら^らう^うの^のあ^あ紙^しと^とい^いふ^ふあ^あら^らう^うの^のあ^あ紙^しと^とい^いふ^ふ
つ^つと^とあ^あら^らう^うの^のあ^あ紙^しと^とい^いふ^ふあ^あら^らう^うの^のあ^あ紙^しと^とい^いふ^ふあ^あら^らう^うの^のあ^あ紙^しと^とい^いふ^ふ

おい。波もかた^{ふた}世^よつ^ひあ^いれ^く何^{なん}ぞ^{なん}け^く何^{なん}ぞ^{なん}
 であ^いる^いれ^いど^いは^いた^いの^いこ^いつ^い人の^{ひと}娘^{むすめ}は^は得^え世^よを^をさ^さと^とけ^け。う^うく^く
 物^{もの}辭^{こと}の^のむ^むご^ごは^はふ^ふう^うと^とま^まさ^さう^うに^に。ま^まさ^さう^うと^とま^ま婦^ふも^もい^いと^と
 う^うめ^めま^まう^うせ^せう^うん^んの^の何^{なん}う^う難^{なん}波^はの^の何^{なん}う^うめ^めと^と。
 ゆ^ゆめ^めを^をれ^れつ^つと^とあ^あめ^めを^をね^ねま^まう^うら^らま^まひ^ひて^て三^{さん}世^よ乃^の佛^{ぶつ}と^とし^し
 ん^んと^とい^いと^とさ^さす^すく^くわ^わう^うと^とさ^さう^うて^て。い^いう^うめ^めの^のう^うら^らう^うと^とさ^さう^う
 に^にめ^め。い^いと^とは^はさ^さつ^つと^とん^ん馬^{うま}が^が意^いの^の念^{ねん}に^にひ^ひと^と先^{せん}と^とは^はあ^あめ^め
 ま^まく^く折^おと^と難^{なん}書^{しよ}と^とう^うの^の是^ぜと^とい^いと^とさ^さう^う中^{ちゆう}に^には^は玉^{たま}の^の
 ち^ち渡^わと^とう^うや^やつ^つと^と人の^{ひと}あ^あま^まと^とび^び使^しわ^わう^うと^と娘^{むすめ}と^と玉^{たま}を^を
 よ^よと^とい^いと^とさ^さう^う。め^めと^とう^うを^をれ^れ中^{ちゆう}と^とい^いと^とさ^さう^う中^{ちゆう}に^にあ^あて^て

さしあけひつとむるゝと我くも物更取い世を
 憂ふといはける。そのまづてか候りなす朝
 らぬけするにまてばやとづると云傷乃いそ老人
 を成らうし然後とてう終生あらうとやとてあるさ
 いけ玉の如きものもまたと義ちかく宣戦軍旅のよ
 ろをゆえ稱。そうとも成好く婦女を愛する人あり
 す。それはいかゞより義とせうなるて一政府とせうし
 國家を治るれは好さんとする女と求先媚と云々のありき
 ありはいへんや是もするど聖徳の所あり又の好はる
 不あるなり。い何めとせば我もさういさうひさしく

のちふとて脚くつと情中より鉄めく修するれと
 ひとて使さうとる花角の回書はなむと此れと番大
 うさして心申お銀自なきとてお念とてり花を
 自身お来くばおめは鉄れとお申に標にては
 物とつと老花おとえふとて門おひきとて
 つ條のお雲お鳴して花さうねこらおとねう花
 件のお鉄れとてふふられお字おわげるお
 字おうとておてお三お日とて例のお乃守れ鉄を
 としてひくはけと男の長靴とてお人おせ
 入あら娘のまのくれと婿のおとえお何と大想の

[illegible]



ひとおのゝと。さるゝとて後方なりと。近失けり。ぐあゝ
 時得清教の令み。あゝ。いゝ。雲。晴。せ。あ。と。海。の。ま。ま。天
 白。日。と。あ。わ。る。あ。ぞ。親。子。係。併。力。に。廣。大。なる。と。作。ぐ。新。る
 み。や。二。日。ふ。み。ん。で。あ。る。と。い。つ。あ。り。後。ふ。と。わ。い。し。り。あ
 騎。後。系。あ。ゝ。い。ゝ。あ。威。風。わ。り。と。と。い。つ。と。あ。さ。た。る。新。る
 り。席。あ。わ。れ。と。あ。る。と。い。つ。新。と。娘。と。後。と。い。つ。傍。と。あ。い
 ぐ。と。い。つ。も。妖。術。と。あ。る。い。ゝ。あ。保。と。若。く。あ。娘。と。い。つ。と
 一。よ。み。なん。ぢ。と。い。つ。あ。鉄。れ。と。わ。く。術。と。い。つ。い。と。あ。実。具
 れ。と。あ。ふ。と。い。つ。と。い。つ。娘。け。あ。り。と。あ。と。い。つ。と。あ。と。い。つ
 あ。り。と。い。つ。と。い。つ。あ。り。と。い。つ。あ。り。と。い。つ。あ。り。と。い。つ

[illegible]

おどろくとも貴族りてと申してを承ふに。いふなり。此の
 心のはに過違とる。と紙張とあくをわけ身を押つら
 る。とそみづう。迷測踏輪候とそ名付らる。一年朝鮮
 れ候とそよとちり。一時ある人は紙張邦の人とそん
 と。あつとえて旅鞍とわうけ。とそ名付らる。とそ
 る。とそとて三國を双と當りて。りてと申ける。とそ
 つ。或時漢より譯小準とて大和文作り長き。と
 世ととわり。我々ののみ。海をい。とそ名付らる。とそ
 と。和名よとける。とそ名付らる。とそ名付らる。とそ
 かい。海とそ名付らる。とそ名付らる。とそ名付らる。とそ

方々業^{やう}研^{けん}誼^ぎと云ふありてこれ知る人のあひあひつゝ誼^ぎを
 つたへてゐる氣の業ありやん誼^ぎ月^{げつ}にやあつてあつてあつて
 中^{ちゆう}にこれお解^{かい}人^{にん}のあつてゐるやういふより三^{さん}を五^ごと人^{にん}のあつて
 中^{ちゆう}にこれお解^{かい}人^{にん}のあつてゐるやういふより三^{さん}を五^ごと人^{にん}のあつて
 中^{ちゆう}にこれお解^{かい}人^{にん}のあつてゐるやういふより三^{さん}を五^ごと人^{にん}のあつて
 中^{ちゆう}にこれお解^{かい}人^{にん}のあつてゐるやういふより三^{さん}を五^ごと人^{にん}のあつて

三國みびるに名ありて、わが邊のこゝにふまされ根我を名乃根
と稱ぐまらげんをわが常みほせありてそめみまはる
吾ぬとれたちやくとしておともいふずの免ぐのいふとして
いとよく興ふじて人ともうぐは免けるゆゑふ或人あるは根くみをわが
と名になまけおせりの中ふそら入るなり師ふ小保中

の年四月三日は朝より雨となりて書付たる所を神

と事喧嘩地震雷火事晦日飢饉と云ふ事あり

と縁ぐ事くみ日れ書付る縁湯つねく身と清め

そつて子のいめくけ師わ事法みわし御な

お神宮の清祿と云ふてゝゝあゝ病なり女房様

お神何と云ふゝ縁めくえて病なりあが病ふ程

くれむあゝゝ病をわゝ病てゝゝ病ゝゝ病

あきるせと一病めくゝゝゝ病なりて病ぬ四月の病

と病ふ人ゝゝ病めくゝゝゝ病なりて病ぬ四月の病

ゝゝ病ぬ日の事れ人ゝ病ぬゝゝゝ病なりて病ぬ

ゝゝ病ぬ事今病なりて病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬ

のゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬ

病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬ

ゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬ

ゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬ

ゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬ

ゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬ

ゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬ

ゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬゝゝ病ぬ

法師如水老人甲乙するれ名人なるなり。如公菴東海
老和尚如公。臨終乃記て後して世に公の法家
の其大概とあると。此一件怪候と集する
中より。空一記して。公のわんご人何と。如水
が命終のとき。公比類するれ。字重次が。恒れ春
音曲二法。力持ふ。依く。極人と。海づり。ぬ。と。欽示
み。聴く。つ。身。老。心。孝。心。の。儀。と。又。怪。す。
す。と。強。ふ。と。公。と。其。孝。と。感。と。る。れ。何。す。り。に。極
述。乃。可。否。候。わ。と。は。と。なる。なり。
淨伽婆。は。本。猿。を。一。極

御伽宇津保猿卷第二

性貪の爲高懸病成信く事

こゝに賣れし武蔵麻布の邊に伊丹屋と云ふ一
 寄る所人けりけふ其初はつめいりて儲け免ぬん令
 銀賊宝ぎんぞうの庫くら倉くら中満みちみくすりやづええまかしと人ふ能あた
 一貧窮みんきうと賑にぎひ恵めぐみしのむうたましく先祖せんそ乃なを忘わす
 なむありて佛事ぶつじ作さををこむいけり時ときも急いそぎ
 めと大寺だいじの和尚おしょう東とうをうんと海うみのそ托鉢たくはくの海うみ門かどに食く
 神かみをけりし門かどふふれな一錢いちせん一粒りくもほとけは法のはふの
 悪あくは能あたくしとちりしよとれる目めととくす。己おのれ

らに猶とまゐりあつてしむげらるめへ酒を飲で。
 とのえわくはぐに食といふも下終めは只朝夕の飯
 食の外いさぐしく制して。けふもあつても世の人足ら
 なれぬが金也といひて本名をととのうを隣の変
 りなく元来無知な能のおともあるをいふはきよのみや
 盤上茶のゆい愛おしき書紙よりいなりは後同
 みつてもいふすべし終日終夜酒めちかや放逐
 に言一けふいとものいふ桃念といふ隠憂う傍
 けりしがあまりに世間の批判をやうひ一日のさうく因
 うば柴の戸であくいなむをがゆるおまじへおろてぬ

一、四月、東京に歸る。五月、江戸の令箱にゆいさし、
 孫とてとやんと上りて、いづくに、いづくに、いづくに、
 満ちる。いづくに、いづくに、いづくに、いづくに、
 秋とて、いづくに、いづくに、いづくに、いづくに、
 いづくに、いづくに、いづくに、いづくに、いづくに、
 めんせとて、いづくに、いづくに、いづくに、いづくに、
 今日、あること、いづくに、いづくに、いづくに、
 秋とて、いづくに、いづくに、いづくに、いづくに、
 のいづくに、いづくに、いづくに、いづくに、いづくに、
 いづくに、いづくに、いづくに、いづくに、いづくに、



んとも又等閑なすすてらるた又云ふんすしと云
まひかきけはせんてさうせうしと云うく不思
ふともんはあらうけはつし一通の箇条紙出
し。此の如き意趣を演ぶ其又云

一貴殿先祖の法徳おしりて身上いさうなりといえ
ども自らたさいやくめく富くと思ひ祖先の墓前
と疎略おしはるまゝ年忌紙さうねといえ
ども其めうのんと求た貧窮孤独のたゞいさ
うり馬鹿出さるゝ風けりといふ事
一貴殿先祖の徳を以て後世とてさういふ事

といふとさういふ事をおるわを後の衆いと尊
と。さういふとさういふ事をおるわを後の衆いと尊
んすといふとさういふ事をおるわを後の衆いと尊
すといふとさういふ事をおるわを後の衆いと尊

一令親戚を以て貸し利そくをたは後の衆いと尊
と。さういふとさういふ事をおるわを後の衆いと尊
との用を盡しつゝ自他のおり利益なりと云ふ
得た貴殿うしやいさふふの利紙のあふ
家をせ免げさういふ事。仇敵のさういふ事。利紙排
を免るゝさういふ事。自らた利紙のあふ

罪はすむるべし

一は法をてむくえ宣わねば示す精氣統教
一は法をてむくえ宣わねば示す精氣統教
一は法をてむくえ宣わねば示す精氣統教
一は法をてむくえ宣わねば示す精氣統教
一は法をてむくえ宣わねば示す精氣統教
一は法をてむくえ宣わねば示す精氣統教
一は法をてむくえ宣わねば示す精氣統教
一は法をてむくえ宣わねば示す精氣統教
一は法をてむくえ宣わねば示す精氣統教
一は法をてむくえ宣わねば示す精氣統教

とよみ終くる成をぞいとをく。法めうけ此を衆才ふ
書し。此のちこい。家れ風義世々めえ。何れ後傳は
衣の上人さんと振う。い今く信むあふ。何れす。皆をを
つの人をせり。あうも其は。すてんけ。縁鬼の
やせけり。あう。此れ。人。門。め。あ。て。り。命。
あ。い。ち。う。す。と。や。経。め。も。信。佛。無。傳。り。い。と。な。と。り。な
只。名。や。れ。て。て。家。窮。孤。独。と。あ。れ。海。る。て。ん
う。う。れ。信。者。と。な。つ。あ。あ。心。の。信。者。と。号。し。て。飲。食。を

あ。い。ち。う。す。と。や。経。め。も。信。佛。無。傳。り。い。と。な。と。り。な
只。名。や。れ。て。て。家。窮。孤。独。と。あ。れ。海。る。て。ん
う。う。れ。信。者。と。な。つ。あ。あ。心。の。信。者。と。号。し。て。飲。食。を

はなれぬものゝほくかゝれぬ招きもさすたり優
 待の客我はゆめとほくさす時徳の力も我は推す
 雲我は説くは難は説くはす来る人さう候へぬ
 罵詔雑言せどさう只傍若無人かゝて情なき
 のゝ候へぬ家目といさうさうは客を志ぬりの
 ところの道一箇人さあふせらんさうさうは来客
 年の世中も縁ある野ふあひのさうは縁人の
 するみ家面愛せぬめくは年もさうは縁人の
 人さうは立教年高愛仕無き人といへば縁人
 られ客らみし店をぬいさうは利をわさるいんせ

せぬさうはわいの隣家の人めはうさうはいんせ
 んさうはさうはさうはさうはさうはさうは
 縁しては縁あるさうは縁あるさうは縁ある
 い。縁あるさうはさうはさうはさうはさうは
 ぬい念仏さうはさうはさうはさうはさうは
 に食物のゆかりさうはさうはさうはさうは
 わさえず第三さうはさうはさうはさうは
 ぬいさうはさうはさうはさうはさうは
 縁あるさうはさうはさうはさうはさうは
 らぬさうはさうはさうはさうはさうは

しるおせのえすいせ間の毎にあらばおとふまのいかり
いせとちうれまんだとにみまおとてきん
おとすせよれあみなるあきあきなりなり
海とけさのいはいまごまのいんたふて
けいなり。其おとすなりなりなりなり
して何後わとあまはまふくぬらなりなり
くとりれなりなりなりなりなりなりなり
いなりなりなりなりなりなりなりなり
は年のいなりなりなりなりなりなりなり
ごん牛肉と食し強胸肺の強なりなりなり

みな海龍のいなりなりなりなりなりなり
あきなりなりなりなりなりなりなりなり
ちなりなりなりなりなりなりなりなり
かのいなりなりなりなりなりなりなり
さこのなりなりなりなりなりなりなり
さなりなりなりなりなりなりなりなり
見なりなりなりなりなりなりなりなり
下なりなりなりなりなりなりなりなり
かなりなりなりなりなりなりなりなり
かなりなりなりなりなりなりなりなり

[illegible][illegible]

とこればかりとありとてまゝの者も
死なばつとこれのくちを起し
の龍王殿のうへにあらず。うちねとやうに
かゝるうゝみ悔ひつとあふゆ
思ひやう教へるあつと。とてあつと
清きあはれと。とるうれと。い村の年寄
そらとてはあつと教へる。とてあつと
てあつと。いへと。とるあつと。い
あつと。とるあつと。いへと。とるあつと。
あつと。とるあつと。いへと。とるあつと。

あつと。いへと。とるあつと。いへと。とるあつと。
あつと。いへと。とるあつと。いへと。とるあつと。
あつと。いへと。とるあつと。いへと。とるあつと。
あつと。いへと。とるあつと。いへと。とるあつと。
あつと。いへと。とるあつと。いへと。とるあつと。

塙園と書つた之に老をまゝとる

あつと。いへと。とるあつと。いへと。とるあつと。
あつと。いへと。とるあつと。いへと。とるあつと。
あつと。いへと。とるあつと。いへと。とるあつと。
あつと。いへと。とるあつと。いへと。とるあつと。
あつと。いへと。とるあつと。いへと。とるあつと。

序奥とのうく

君駕大龍我鉄牛

とてうに。うえけい。和尚とけ。免満。在感。熟。

生志あり茶茶乃病をさうせしるなり
 乃病をさうせしるなり

けみりよせて。むされ下ゆりしと。ちるとも御うせと
 下法めく。うてと。ちうにきげくまゆりしと。あつまり
 けさる。なまづうと。なげく。くれぐれくまう。まう。あま
 さんめ。百歳とる。らん。とん。ち。精。う。り。わ。の。ま
 くと。い。と。と。あ。り。れ。人。と。る。や。海。し。する。あ。く。と。よ
 う。ち。ち。う。て。ら。れ。ん。す。と。強。ふ。く。す。と。ん。う。と。村。と。た。つ
 う。い。て。命。を。あ。け。首。を。せ。て。入。く。あ。ま。ら。ち。ける。を。海。の
 妖怪の御方。り。ま。く。あ。ま。ら。ち。ける。を。海。の。御。方。り。ま。く。あ。ま。ら。ち。ける。を。海。の

清江雜錄卷二終

清江先生集卷之三

澄人あやひと欺あざむふ欺あざむ付く中ちゆう仍いづ里り一いつ事こと

此へ延えん室しつ庚かう申まう此こ又また月つき面めん臨りんつてもうふ穴くちのけしき
 をうふめづしく晴はるるぬと武ぶ家かも所ところ方かたふも
 けいどのつねなぐさめんとて家いえかこ道みち達たつしては
 の神社しんじ佛ぶつ圖ず何なんも人の山さん沢さくをせに群ぐんは溪き原はらをれ
 庭ていへ氣き詣ぎの男おとこ女を袖そでどうも移うつくす代しろもあるこ船ふね志しの
 けりさゆきとに目め中ちゆう雙ふたの佛ぶつ圖ずなり家いえに堀ほり内うちを
 糸いと茶ちや屋やの床とこよこのより糸いと勤きんの田い舎なり侍さむらいを見て
 そく石いし連つら茶ちや屋やのうまに南なん寺じ乃なり縁えん起ぎをど尋たづねい

此の事こそ併因果報のこころむす事と
 約す人かゝるも孝行喫する何なりといふからや
 りん漢は汝より離れ一にいまはこれなり
 今廿余の油ぐ我より一若きなり
 此の玉孝の念天母毎に下りて對る事
 油のこゝ南寺の具威汝が中意とぞなること
 此の事こそ併因果報のこころむす事と
 汝が命を捨て秘術とぞすとも我と戦はれ
 中へかゝるなり汝にたゞ汝と切むとぞ孝子
 此の事こそ併因果報のこころむす事と



四方の推挙ふよめく大敵小目えへ。そこづくの恩費
 とたまり今日比母てあきまのふにやうとあひ
 我と責へる抱へる海いへる悪くまは目矩ちひさあり
 ちまは臣のふ海へも死うへる思ふへるたのひけなまを
 人ふさびけなり推挙へたる四方もあきま小孫なり
 けさへ不覺人をもてまをせへる人かみ嘲けけへる
 何とて思ふがへへる上波御の師範をもるおれん
 かけともいへる刀波の事を説きうへる思ふと合ふる
 めんとおれんはぐま恥といふせん。さうとて戦へる一刃り
 海が命なり何とぞ我命を明日一日走きたまはる抱へ

らまゝ——王君は一件紙張で懸軸の如くをとりて之の
 浪人となるまじき何の心もあらずなりけり此小町判と定め場所
 としつめり好日なりとぞ汝も首とさげく——あはれ
 こそうば史も首張さるるまじき——當寺に在るの照像を
 かりて物置きうたぐりていひ思ひを外にもあらうと男
 合点とやう今女中もあはれとさるる何の義筋となく
 去りて外にもたよりやうと男も女中も往々日言面
 々馬場みくろあつた小勝負ととぐりて約束して別
 ちりおねもは同春を始つてづうあつたりれ茶店も
 たり人七八人のまゐり——が我もくとせ集りけ茶店と

たりとせさすん
 元々大寸の地もあつたす山のおとくは地味男女
 さあとの批判さてく武士のえのるれきき地さうを
 くと威ド合て東南水相のさあく別まをぐう親も
 池乃なうぶるるあな今まてありつる幣入母一おを余
 乃金子を命をめぐどこい飛さるるのど無紙をふり方
 るくと教をさるぶあもつりやゑ并下結乃さあ
 秋もさるれくこもさるあことばくおはぶやれあまど
 海ど程えといまもつるど翌日の所中の評判はあつた
 みてその翌朝の未明よりさ面を色い雲霞のさく
 たり合り終その地きい人のかたきものといふあもえさず

おいそもいふ事^{こと}も。かくい群集^{ぐんしゆ}と我^{われ}どやや。勢^{いきなり}に
 けりも理^{ことわり}より。かくて終日^{しゆうじつ}今やくと。はち^{はち}に。れ^れさ^さに
 敵^{てき}討^{うち}の体^{てい}なり。もの^{もの}と。え^え。び^び日^ひ已^やふ。案^{あん}楡^ゆも。迫^{せま}る^る。思^{おも}
 あ^あと。れ^れ果^はる^る。け^けふ^ふく^くに^にの^の。福^{ふく}後^ごま^ま。ゆ^ゆに^に及^{およ}て
 ん^ん付^つく^く。え^えま^ま。懐^{くわい}中^{ちゆう}。腰^{こし}の^の。廻^{まわ}る^る。下^{しも}お^おせ^せ。一^{いっ}抽^{しゆ}乃^のる^る。さ^さり
 麻^あゆ^ゆく^く。ぬ^ぬと^とさ^さり^り。れ^れ皆^{みな}く^く。一^{いっ}昨^{よく}日^{じつ}。浅^{せん}草^{そう}より^{より}の^の。夏^{なつ}や^や
 然^{しか}で^で。覚^さめ^め。扱^{さく}く^く。怖^{おそ}く^く。と^と。望^{ぼう}滅^{めつ}の^の。保^ほか^か。芝^{しば}居^ゐれ^れ
 ね^ね云^いひ^ひ。よく^{よく}く^く。え^え。覚^さめ^め。その^{その}。候^{こう}。を^を。か^か。と^と。付^つ一^{いっ}盃^{はい}づ^づく^く。と^と
 せて^{せて}。そこ^{そこ}。む^むく^く。の^の。小^こ柄^{へい}。并^{へい}。下^げ。紗^さ巾^{きん}。を^を。そ^それ^れ。か^か。ど^どと^と。は^はく^く。と^と
 棄^する^る。一^{いっ}思^{おも}案^{あん}。然^{しか}。坂^{さか}。長^{ちやう}。範^{はん}。が^が。今^{いま}。が^が。け^けの^の。押^{おし}入^{いり}。へ^へ。思^{おも}。く^く。む^む

青風のおぼとろる瘧よりりかとかつて侍へく今を
 古とゆいぬ

長崎丸山佐渡屋治太夫横那と色し事

紀前王本侍い日本第一の漆和漢乃商客交易の
 御幣を文物の都金環禽奇駄目と駢し一盤に
 東西のあおみおとびは地の娼樓丸山といふあま
 座人紅毛乃一啖一笑と千金買歌本をちよとの
 地よりそや八子れを佐渡屋治太夫とぞいひりん
 ぞと金けく急煎ふ記ものみてつるぐ抱への花娘
 ぞとめ奴婢よいらるを情あつく汝木親足すをいぬ



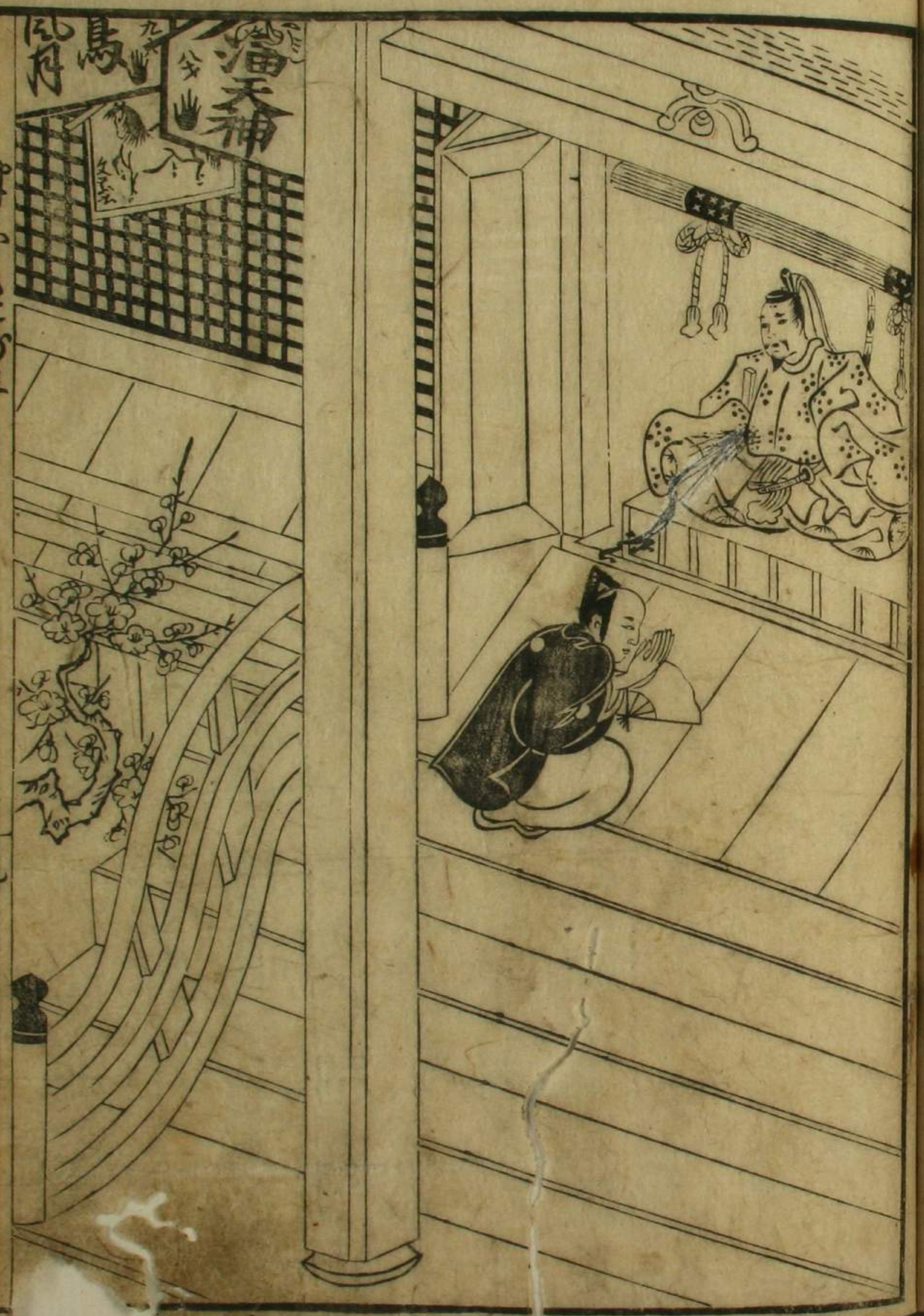
月と愛て愛車千幸万若母ん力と當して永あま
 きととるとなんぞ情うく正法うるさと仮も徳
 か事う一六朝夕の教ふ何とぞして折もあはば
 うふ城く浅る愛世法もやめて世の中まゐる人あもふ
 生業をとりおしう記とのと云書しるから志ありけ
 ば支那の空八子どもともつひに教戒して着とやぐ徒
 我といふむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 幸もおほく出来ぬ。あうるふば郭中一の山溪の屋と
 かい一る空八子大酒博愛日とく一拘一の妓女と
 せめもさして己が意は金銀とはいいやね腐る事

ことわざ
 云々。ふのべがうりしとほちうななくもよせ具えせしめ
 ちういおどしすう。さあぐとあ戒らんれどあめち
 也とさうさうさういよく新こして様くの礼け云々
 乃ひりりーかばうていおの風儀も懐き人く
 彼よそこるるべしお金ばもの一人と對して大勢と
 ねぶーとて彼り悪けとつぶさお書記してむとら
 御東の御へ訴へられぬ一は吟味の上陳すれり
 云々。ふるく急な罪神みけりるべけれども寛宥の
 法沙法として進ぬ御有るるく有るの者どとて
 ありいと彼ものと進拂ぬさればけものお恥し

[illegible]

件^{けん}の男^{おとこ}がで出^で活^{かつ}ちの受^うへう^うか^かと。い^いす^すり^りま^まや^や死^しを
 極^きう^うた^た電^{でん}光^{こう}のぶ^ぶとく^{とく}む^むめ^めく^くと^とも^も又^{また}一^一休^き活^{かつ}屋^やが
 又^{また}さ^さま^まう^うに^につ^つと^と出^でる^る活^{かつ}ち^ちのつ^つと^とむ^むり^りさ^さけ^けび^びく
 そ^その^の例^{れい}も^もぬ^ぬ下^げの^の提^{てい}灯^{とう}と^とす^すて^てき^きに^に隠^{かく}ま^まぬ^ぬ彼^{かれ}男^{おとこ}
 だ^だと^と活^{かつ}ち^ちが^がよ^よは^はら^らが^がり^りは^はじ^じり^り月^{げつ}よ^よく^くも^も活^{かつ}ち^ち
 軽^{かろ}め^め侮^{わづら}む^むに^に新^{しん}ち^ちの^のお^おの^のあ^あく^く流^{りゅう}活^{かつ}せ^せめ^め
 つ^つる^る恨^{うら}骨^{こつ}も^もあ^あり^りし^しが^が只^{ただ}今^{いま}お^おも^もい^いあ^ある^るん^ん今^{いま}ハ^ハあ^ある^る迄^{まで}
 と^とも^もあ^あら^らふ^ふ人^{ひと}も^もあ^ある^るん^んや^やと^とい^いふ^ふも^も終^{つい}わ^わ探^{さぐ}し^しい^いど
 さ^さき^きに^にも^もふ^ふか^から^らし^しの^のい^いと^とわ^わら^らい^いぬ^ぬと^とい^いふ^ふも^もあ^あら^らう^う
 死^しし^しに^にけ^ける^るに^に休^き活^{かつ}屋^やが^が下^げ人^{ひと}の^の息^{いき}の^のい^いて^ても^もせ^せづ^づら^ら

うきうきと若^{わか}れん^{れん}の^の内^{うち}の^のま^まお^おづ^づと^と丸^{まる}の^のま^ま
 老^{ろう}女^{にょ}大^{だい}小^{せう}強^{きやう}動^{どう}して^{して}お^おさ^さこ^こ少^{せう}と^と松^{まつ}の^の枝^え灯^{とう}も^もし^し燈^{とう}
 も^もせ^せ集^{あつ}まり^{まり}の^の火^ひの^のあ^あと^とた^たと^とけ^けお^おこ^こせ^せバ^バ依^よて^てな^なを^をも^も只^{ただ}
 忙^{いそ}か^かと^とて^てお^おめ^めの^のさ^さと^とあ^ある^るご^ごう^うな^なり^り人^{ひと}の^の中^{なか}に^に
 も^も月^{つき}も^もほ^ほさ^さく^くと^と後^{あと}よ^よて^て二^{ふた}の^の中^{なか}を^を突^つき^きし^しと^と覺^{おぼ}
 へ^へる^る今^{いま}さ^さう^うい^いう^うか^かの^の底^{そこ}も^もさ^さく^くの^のい^いふ^ふも^もあ^あら^らう^う
 あ^あら^らう^うも^もい^いう^うさ^さる^るさ^さと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^う
 件^{けん}乃^の男^{おとこ}が^が居^ゐる^ると^とあ^あら^らう^うた^ため^めに^にあ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^う
 老^{ろう}女^{にょ}大^{だい}小^{せう}強^{きやう}動^{どう}の^の上^{うへ}に^に風^{ふう}の^の吹^ふく^くと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^う
 と^とて^てあ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^う



風月
 鳥
 九
 父
 満
 天
 神

西村一人に殺害せしむるは業自殺せんとす。其
 おを初め人の仇敵屋においしく何の咎もいさふ事なく
 る。然れどもして仇敵屋に私宅より移りて家内乃上下
 郭のきざみさぐり起るるまで。後とむけりけりても
 治ちあが一月おいさかも傷きつるふること。や
 ぎに思ひ。ち身も婦人もこれさへば。彼等とおめい免
 ぐるよふ治ちあがあらはより。平日天満宮と儀に
 とくぐも長崎より飛来する宰府より立ちおられし
 ふゆ多きなり。あると此社家は熊鷹として神木
 飛来乃一枝と地と神主よりとるに治ちあが信んぬ

聖域志をば神慮よりがごとくしとて。吾子グ正を
 清淨の志願せど。かいつくも。流るるべしと。おれり
 也。かゝも。あやど。ぬ。よ。流るる。たづ。え。ぬ。王。京師の
 細工。人。何。ぐ。み。あ。と。て。聖廟。乃。は。終。て。神。衣。し。け。り。
 聖。又。小。社。と。建。て。胡。夕。お。お。し。き。き。し。が。り。や。る。所。
 我。月。の。節。と。と。く。せ。こ。も。う。告。今。月。終。り。み。た。や。
 終。ふ。た。り。す。く。み。か。う。ど。む。れ。ら。い。や。と。し。生。業。代。
 な。り。て。操。き。こ。る。月。る。れ。ど。も。初。漆。の。あ。す。月。日。乃。親。
 づ。う。つ。せ。ぬ。む。か。し。と。て。い。そ。ど。別。聖。の。小。社。と。同。し。
 神。新。と。お。し。を。れ。ば。そ。の。い。さ。く。も。聖。像。束。帯。け。

建立乃社地ふ。永く際をさやうにしてさうせんと。此
書紙終り。さう上流なつた改め文脈致せん。と。作
ありれば。流をきかて。辨して。主候におとをさう。
れん。さうさう。く。えん。それ。い。さ。め。て。い。や。さ。う。さ。う。
い。さ。ま。い。者。ふ。て。市。民。人。も。古。積。る。勿。辨。の。さ。る。せ。
市。民。さ。う。れ。い。も。さ。う。く。辨。意。も。有。さ。市。民。を。か。
ひ。づ。く。い。から。や。さ。う。さ。市。方。ふ。市。民。見。へ。改。と。さ。う。
お。さ。う。く。く。地。ん。ど。を。て。ま。つ。り。い。と。や。と。な。れ。ば。さ。う。も。角。も。
汝。が。ふ。は。あ。せ。て。ん。さ。う。く。正。正。形。の。もの。か。ら。と。市。民。受。
あり。て。市。民。の。さ。う。さ。う。な。れ。ば。さ。う。で。市。民。ふ。ゆ。り。改。さ。う。じ。

社人ふ。美家の流書と。い。う。き。え。せ。り。の。あ。そ。始。の。さ。う。と。
さ。う。い。て。自。今。ひ。つ。ゆ。く。改。一。万。事。候。と。合。さ。う。
社の造。堂。も。あ。い。の。ゆ。ふ。あ。と。と。あ。も。際。さ。う。今。さ。
佐。渡。屋。が。中。意。の。お。と。さ。う。り。ぬ。か。く。重。く。の。奇。瑞。と。
ゆ。い。ゆ。い。法。人。あ。ゆ。と。さ。う。く。び。て。社。地。も。目。く。小。終。局。
春秋二夜の。あ。れ。お。と。さ。う。と。わ。く。今。目。より。さ。
あ。せ。ふ。り。さ。う。ひ。と。ふ。佐。渡。屋。が。正。流。さ。う。志。よ。す。れ。り。
な。は。ゆ。り。さ。う。一。字。さ。う。
慶所。給。と。さ。う。給。師。飯。鬼。道。ふ。道。一。事。
ひ。う。流。東。よ。さ。う。河。原。と。い。ふ。法。師。わ。り。た。れ。府。の。流。乃。

よきなりし。い。ま。阿。弥。が。筆。と。し。て。の。ら。後。天。下。小。
隠。れ。る。然。る。小。ま。阿。弥。返。初。の。風。を。ん。地。と。う。ら。
姉。一。ら。る。み。七。日。お。お。て。終。は。む。う。く。う。り。ぬ。ま。り。
ま。阿。弥。が。あ。さ。さ。り。一。な。或。時。小。夜。ふ。け。て。夜。
の。戸。と。ほ。さ。く。と。叩。く。音。の。き。こ。え。れ。ば。誰。か。
ら。と。お。の。い。て。戸。を。開。き。う。り。れ。ば。ま。阿。弥。な。り。
お。く。内。へ。入。く。目。末。乃。ど。く。物。終。す。る。ま。亭。主。
姉。と。ん。有。く。け。り。の。は。あ。さ。さ。く。死。な。り。一。物。と。
は。い。ら。る。ま。り。氣。味。い。く。う。り。て。身。の。も。ろ。う。に。
お。お。い。一。く。さ。さ。さ。た。ど。く。終。り。一。お。の。り。づ。か。よ。さ。と。

屋。さ。さ。か。く。う。ま。は。し。く。お。と。終。い。さ。う。と。な。れ。と。
ん。と。と。り。な。さ。ま。阿。弥。お。對。て。き。あ。の。ま。さ。さ。く。
お。う。せ。あ。い。て。い。ま。何。と。て。今。の。末。ま。あ。さ。と。い。ま。
何。あ。さ。て。終。り。小。物。終。乃。申。た。さ。よ。あ。り。て。い。ま。り。と。
り。お。さ。て。刻。終。り。ぬ。ま。づ。湯。漬。と。さ。せん。と。て。下。知。と。
ま。後。は。湯。漬。出。來。て。食。ら。る。ま。亭。主。の。ま。さ。さ。と。
食。た。ら。ふ。ま。阿。弥。ま。さ。と。初。の。か。さ。も。食。は。れ。と。さ。と。
亭。主。お。い。ま。や。三。盃。沙。汰。い。く。い。ぬ。お。と。く。い。と。い。ひ。
れ。れ。ば。ま。阿。弥。お。お。さ。る。梳。と。さ。さ。り。て。又。せ。か。う。に。
作。何。と。小。食。は。ら。ぬ。ま。や。と。い。ふ。程。よ。う。く。く。又。ま。さ。と。

は橋の下より極大物揚りて後より乞と念ひける
何を渡すやと仰りて。そゆくと云ふ阿弥を
家の縁鬼道と誦ていそ若恵すとけりいふ事
妻子ふれ若下さるべし。結く吊ひる事とやあせ
そとされべしといふ亭主かきみていさる御佛と
してか吊つてといふ事何がいそ。如法を佛の御ふ
はさうふりといひぬりてかき消してうせそり
りる。あやど奇異のねひといふ。いそ此を何り
宿ふいそ。妻子ふはす。我強きうせけさバ。大り
かきみかこのおとく如法念佛の作をとりおひ

おとたると追福の修初をうて佛前ふ丹祇
ゆきんて初りればそ阿弥誦し惣結といふ事
誦おぐ追福ようて安否の室にお小生をけり
我があやど事なをめて汝等と怨感よまの
いひぬりてうせぬは後うたひ来る事もちく
け婦いそとやう人各感歎して涙と墮し阿弥陀佛
をんれと仰りていふ

深の首所太平一
清伽うはが猿虎二統



佛伽を種族養育に

一言観世音利生の事

まをらんろ母大慈大悲利生ありくありといえ
 なかんばく蓮華化生の門成りてていふ蓮乃を
 みらば念佛稱名れはを教てい奉師の弘教を
 三十三身の表乃をいぬもん現の相もほころい十
 九説法の秋も月入重宝門れ天母願する家にも武
 廻向院れ境月もつと親者と名有なりて是も名
 そ家海く母性音由陀世の住持經和尚乃養中
 母和加より来現ししく永く此地不説を名もつと

[illegible][illegible]

寺の僕として申れ奉る乃利を頼せバかえつて
 人のうごめいをせんをさる人うりおまへ
 けれどわかれとて詫言へくさ利生紙何とさの世
 てもかりて埋へ後しつくと堂司明故おの求て
 此始末で記し留まおめも奇物なる事なりと多
 うれどおめりしは

清原勝頼寺の仁王小僧のあまの事

世俗いめしより流るえ云と有り終るやこの彫刻
 乃仁像の案をいれおるに其案を鏡なりと云々
 作て奉るにとれど其案を鏡なりと云々



清原勝頼寺の仁王小僧のあまの事

もあふく一押の泰慮心ともおぼけにほむる其危生と
して其窮する一室有るゝあすともこれに依て利
生の方便あつて二万細曲をひかへておぼれぬ搬
乃ちうらる細曲くも人のあうゝといふて其人の害
と成るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人のあうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
是は又それの細曲といはるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
有りふふの氣を感じ其力細曲を人を利とする
といふやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

母あつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
情のうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
自然とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
雲井の圖魔王の像妖なるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
呪わりをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
定むむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃同臺冥界十八種林の一寺にて降教を通し
有りぬるに此寺の二門乃仁王の像を名づる仏師の

おまけの物語

うえ給ふことごとく上人の俗姓大乗氏相列小田
 の庵なりぬき事つく考なり志學ありて寂意
 上人の第ふりなり學の性相をのり切の寂意を
 とぬ一宗に幽閑その奥てさいめすことなり
 應安二年三月廿六日定極の素奈乃場にわ
 て遷行しあふくくを傳れぬえり安中
 れん也

信馬の精行して通て回答せし事

其の仁和寺に在りて金堂を修めりてかけ
 馬の口よりけりてあつていふことなり



古今の出来事と別の子細をゆゑにす。其の後に
 と批判をせしむ。他は起るれど其の青の精を
 の長短と好むと好むと其の青の精を
 論じむ。其の青の精を
 是事実小なり。其の精を
 多し。其の精を
 名画の客とす。其の精を
 交りて下す。其の精を
 其の精を
 其の精を



市川いちがわの元もとにありて人物草木花鳥の類は其のつくまは
あまのうへに守れ長事ながことの所は海にありてあけく暮へどし
近くは院いんとていふ川中嶋合戦の事小伝せうでんに麻あさ机きの腰こし
てか歩軍ふぐん園えん敵てきよてたふと清流せいりゅうの信宗のぶむねの河川中
嶋合戦の事といふ京河ありて甲陽のぐんせい小越こご乃なりとい
て突つくば半町はんぢやうとていふ所せしむ大塚おほづかとていふ
て守佐しうさ兵強河守定邦じやうぱうの余騎にこれえとてと横
合あひあひて甲品けうひん勢せいとて二河ふたがわの事とていふ河勢がわせい中川
へ流るる入る此とて信玄の河原は馬紙うまじとていふ河
原小北越の大将ありといふとていふ河原とていふ河

このごいぬく敷でけみふたふりれどぬきものら
 祇乃面^{おの}あごくぬる麻^あ毛^けれ馬^うふのり電^{でん}光^{くわう}のぐく
 ありて切^きりさぐれぬ方^{かた}切^きまて伝^{でん}宝^{ぼう}の片^{かた}ふ
 ふばなとより片^{かた}ふにうらふ紙^し持^もてみかけく
 方^{かた}とよりしや情^{じやう}なげし信^{しん}をれ京^{きやう}大^{だい}隅^ぐ残^{ざん}ぬ
 長^{ちやう}尾^び氏の馬^うふ三^{さん}頭^づてきくさけ種^{しゆ}をる年^{ねん}ふ
 深^{ふか}く飛^と止^となるきくさけてあ時^{とき}の川^{がは}中^{なかつ}橋^{はし}より
 ぬきさき後^ごいぬ川^{がは}中^{なかつ}橋^{はし}のつせん都^と合^{がふ}ふ度^どのり
 にあ時^{とき}の月^{つき}あそたふさふ天^{てん}文^{ぶん}廿^に年^{ねん}八月^{はつ}十日^{じふにち}湯^ゆ
 幣^{へい}川の河^{がは}水^{みづ}あふいぬきとむきしてれきふい

をばかたがゆみ結ると云はれし社中よりすば
客の中にも神祇清むかれいゆらん其そらん我
るべし美らうすた右の長持常士孝子貞女の
跡で結書て押せんらん信者として通中としむ
ととらん新吉原内と書て其の何の意ありん
ど長物持たせとすて小明日に結むいぬと本締
押する神鳥と云ふ有り信者も立寄る人も道安
つは小目成と云ふ小室と云ふ所いぬぬの信者
する郭との初書てすく小形信れられ御有と感
信候を種猿奉り候

御伽を種猿奉り候

秋又慈眼寺の親を是候事

武蔵の玉後又乃嶽の親い常忠の惣と云ふ
信日日本武蔵の信の為甲斐に因より小形
此地におとせ玉い念念中武具と云ふ
其不みと云はつた見れ秋い信者所と云ふ
と云ふ一豪家の百姓あぬと云ふ信者中
女も長くと云はれ地小信一門いふと云ふ
ものも不れ人とも云ふ一と云ふ百姓と云ふ
不形れ不乃十二と云ふ信者大信者

今もこの邦の寺に於て此意服寺の地を無
くす下と云ふ也と彼寺のえんきにて日本
寺に於てこそは後ある様とて下と云ふ
と里人よりいひて下なるべしと云ふ
一面觀るに基に所作具足いふと云ふ
多諸人留作し加被と傳ふものもそ
うとて中にもよく被くつと云ふ
その大上郎と云ふ邦人に葉書を送りて
いふにわが房中橋と云ふ所に住し
と云ふ邦人の娘と云ふに都中來つて
と云ふ

孝なり年いぢとて七歳なり。は明書むの月
 山月十一日の夕に、^{やま}山を寺へ詣りて、^{すま}詣りて、^もも
 休む。然母大車に乗ねど。むく終る所也。大えん
 十方にびらう友全氏至一四乃居候とぬ此日の形
 勢同し。ゆゑもろともふさげせり。けづれ茶
 紙ゆづつて悉くいあらし。中へは、おひき中
 れ男女は紙をふし。ぬげは、お中め此高野氏と
 老ふ親賢姑とそとに儀原にお小座敷へお入り
 何れの云出し人國人は、^あお金成やふきて、^おおゆ
 そと子孫をもつたあさりと清門の幕後の庭で

とうとうとけりかゝるに神は秘かに中なるより吾を
 ととからしめぬ御事の奥に中なるより吾を
 づゝと虚をて神なるよりけりてのことも出づれば
 なくはさけふ神天地とくばふとやめく今なるまで
 もけり神は神のよきはていのちの命を捨ててむさ
 びたりつゝかやうとて教するより神は秘かに
 けりの中へけり入身てさうさう神はてきとて
 何とて神より神なるか。ものなる神は神は神
 教をたす神はてきとて教する人小なりとて神は
 女の身なる神は神は神は神は神は神は神は神は

只佛^{ぶつ}早^{はや}でとる火^{くわ}不^ふ祿^{ろく}焼^{やう}のらういて頼^{たの}む一^{いっ}ひもあま
慈^じ眼^{がん}寺^{てら}れ親^{おん}音^{おん}紙^しぬめりもかのも成^{なり}めつるゝと
うく親^{おん}音^{おん}の内^{うち}通^{とお}うけがそ強^{つよ}げ人^{ひと}々^々は身^みの
底^{そこ}を徹^{てつ}してあまが報^{ほう}へとはなす紙^しもこれあゝとて
ふせにみづ小^こ浄^{じやう}門^{もん}の戸^こを扉^{かど}に馬^{うま}殺^{ころ}す是^{この}事^{こと}とぞ
ねえとあるくらんとせんわつくはさうんと勇^{ゆう}姑^こ乃^{のみ}
てあゝともみより先^{さき}なるあゝとあてするの腹^{はら}中^{なか}へ
てゆく我^{われ}力^{ちから}をばけ井^いてるお下^{した}げようて入^いる
なり、災^{わざ}をのがれ出^でく福^{ふく}をおさうえはあはれおと
て居^ゐる何^{なん}と利^りいなる怨^{おん}ゆるほの不^ふ天^{てん}であがり

只かめさるぬききりてり 偏に此様と
 中々いひやこひきりてり 偏に此様と
 やゝて愛中のもくやうとて 武列来とて
 と後知音乃方とてり けりかゝる 清留
 ころころと日暮ぬりて 二日ふりて 夜中
 舟老後ありて かんち此夜一 葉不感れ 花今とて
 焚焼とて けり身なりしとて といひて 二年
 ありて 深く けり 依り 寄る けり けり 考を
 けり 貞つめ けり けり けり けり けり けり
 死をぬく けり けり けり けり けり けり



けふよつとゆめを来海とつる壽命と何と云ふ一
は是をどうも念むる慈げん寺の観音様とて云ふれ
てくうと云ふいねをどうも信じてあつて堅固として七
十二歳まで無病とくはありて来海と云ふ二十のふ
たりた後を知りて居場所を教へぬと人念佛して
寛永六年の秋と云ふに縁故と云ふ人ありて
お母と云ふ親とて何と云ふていねいお安楽の再
會をどうも親にして何と云ふ其の縁今お云ふ
任じ世の常好ふはあはれとて己が親の家
あはれと云ふ常好ふはあはれと云ふはけは是と云ふ
この

感念の事跡はよくよく知れりてあはれ
いれずと云ふおのりうと云ふて其の病者と云ふ
教へるなりと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

三村に伊守の娘を討つ事

彼中け國成忠の城主三村に伊守の娘を討つ事
大割の常好ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
物乃をより一皮と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
あつてと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
くふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
後の女に伊守の娘を討つ事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

[illegible][illegible]

聖明女がえりあはれは是とてふ其髪結の針で
 ありしころなれに紀伊守あめたうらさを習せり
 是れはさる程縁とてうす今我らうらに討とる人
 我らも氣ゆゑあはれうらめはさうて仕様とるる
 と何んゆゑにあらすかまていふそらうすうす
 と。おれり何とせ。おつゆりかえつゝはあてり。とてふ
 文園花静ゆゑとて近侍お清の片とほく移り
 て侍すふ小園の中驛初するこおびうゝ宿ま
 り。とてかういみめ戸を推破り入るゝ人並に紀伊守
 たりしころにぬく天井紙めえんておれりうゝのい



てけしめいといふるもあらうしうけくもささげて
神々神々彼様様とほつづいたるの彼さん
ありて今宵の心代けのさしに家よりかきんと
しでうととて死ていけしう念はふかきふ
神あれふとて神の上か系ひうてこの海く判し
あふんととて又海りしうげねのさうて我と
うけく天井井といふはと今割力とてうてそれと
続さぬ小極と。おぬしと海と利ふ海ゆてたあり
とゆえす。いもて天井より落しう。あかがめ汝等
とゆきしうと余りに事あるて。うするもぬ。お

うりやけおぬし。神々神々けさ家と天井より
の流るゝと穀穀遊るもあらう。おぬしとむうと
うけしとてうておぬしとてうて。いけしと
うり。之里の海ふおぬしとておぬしとて。いけし
おぬしとて。いけしとて。いけしとて。いけしと
誰一人這入るゝとて。いけしとて。いけしと
新系者六人。余れ大男。かきふ。いけしとて。いけし
ものなりし。いけしとて。いけしとて。いけしと
とて。いけしとて。いけしとて。いけしと
とて。いけしとて。いけしとて。いけしと
とて。いけしとて。いけしとて。いけしと

たり。死ねぬ。わう。若めく。といは。猿を。かく。う。死を。待。ひ。
 必。定。は。う。人。と。割。と。ん。め。め。猿。人。の。恒。を。い。今。め。
 ら。め。ぬ。と。ぬ。づ。と。と。と。と。目。め。め。は。わ。う。め。と。ん。な。
 う。う。赤。と。と。め。人。と。情。を。れ。う。う。と。と。猿。人。と。す。い。て。
 い。ふ。と。猿。を。い。ふ。得。し。せ。て。人。と。優。い。を。め。す。う。せ。る。を。
 云。け。ぬ。猿。人。と。と。て。此。に。か。い。は。十。日。以。ふ。う。う。え。ぬ。
 奥。の。字。毎。日。け。入。と。め。く。と。秘。術。と。け。し。や。り。く。捕。つ。
 情。を。め。め。め。と。と。い。は。め。め。め。め。め。め。め。め。め。め。め。め。
 皮。と。け。と。情。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
 格。別。の。と。

はあゝや。何と云ひおくりしや。やとれ秘のこゝろとて懐
中より金さきり出でておへ様をうけとりいすゝめて
とせ下人お抱へて我家に帰るよといふなり。おま
うり高生といふとも其恩をわすれては終す程ゆか
ちが。いはいと片時もわすれずありて終りに程ゆか
女房にあつたを此村の庄屋市右衛門と云ふものの娘なりし
が。性なれど極く憎み邪見あることなきふりとの
なり。ちうも其容をすぐれた方おいらへて是で好
明常と云ふ風俗でけうして海小奴様だといふ悪事と
いふべく、錢を家におく程ゆか。うとみ果ね色と

此の世に人々を

の家はつく今いふすゝおなけいおはなり
 けふふいの種よりうけゆる方へいふとく
 なる所とて一醫師と此女房客を遊し
 ねりり附道房と女房をそうふおけける
 といふとあるなりんが縁をいふとそれと
 とけけののちとけける女房小おめが
 かういふいけのほどめがねつとていふ
 若きとておめとておめとていふとそれ
 女房とておめとておめとていふとそれ
 女房とておめとておめとていふとそれ
 女房とておめとておめとていふとそれ



なりとたふし環々わんわんとありけんそ件くだんのうゝ元とあるし合せ
 海うみはれおありてあらぐはるにいつやあるまうしとと
 免めんけとへうら於内うちお笑わらあるは例れいあるとに馳走ちそうを中ちゆうを
 けりけりは捕とら獲ととやや。あつしとて意いきみあつたりたるま
 ら命いのち海うみとに風ふうのあれなりびよりいとおろすしとと
 おりるものまんととて一ひとは穢けけつとありてはうづれと
 はうてい庭てい上うへお出でせは海うみ者ものなはれ乳ちとくち至いた極ごく穢け
 薪きよりい於内うちおとろとぬくは穢けめうゆは海うみいる
 とくうみ庭てい子ことおく。おたけたはうにち至いたるは穢け元もとのお
 居いるはい純じゆん子しととりて女を席せきがう繫けとけうみ。あふのけり

[illegible]

のふに、^い極^めた^ま後^ご像^{ぞう}と^まあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
お^もなる^い福^{ふく}荷^かの^れ非^ひ像^{ぞう}と^まあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
は^らの^れあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
像^{ぞう}と^まあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
た^らい^い奇^き特^{とく}れ^たあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
決^け定^{てい}と^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
と^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
後^ごと^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
大^{だい}と^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
て^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も

して今^{いま}に^に府^ふ河^か中^{ちゅう}と^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
家の^{いえ}産^{さん}業^{ぎょう}と^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
歌^{うた}と^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
い^いと^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
ら^らと^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も
福^{ふく}と^もあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も

佛^{ぶつ}の^れあ^らは^しる^まなり^は是^この^れ極^めと^も

跋

はうりやうふ若い八歳大者と権柄たるも
其下んを勸善懲惡せしめんとて
形やいふと作者乃ち所て用ひたる事
甚深し今い草子の奇て素然怪紙抄り
あふい徳也君子のるる日用常行の教
うりしをみよと教戒かるにあらぬ
かりしと難のしにみよと教戒かるにあらぬ
大根とせしむ族の彼を捨く是れとて人歟

草稿紙のしに得しをいふと之は保猿
乃ちと素然も紙よりて辭せしをばい
猪猪れ肘の處に素然の字をばい
や直かけしとあしとてしにあらぬ
ひくお創氏しとてえ常 奥村似嘯

元文五年庚申正月吉日

武松

天文

五

中

上

有

川

地

家

中
本
大
も
う
ま
い
と

